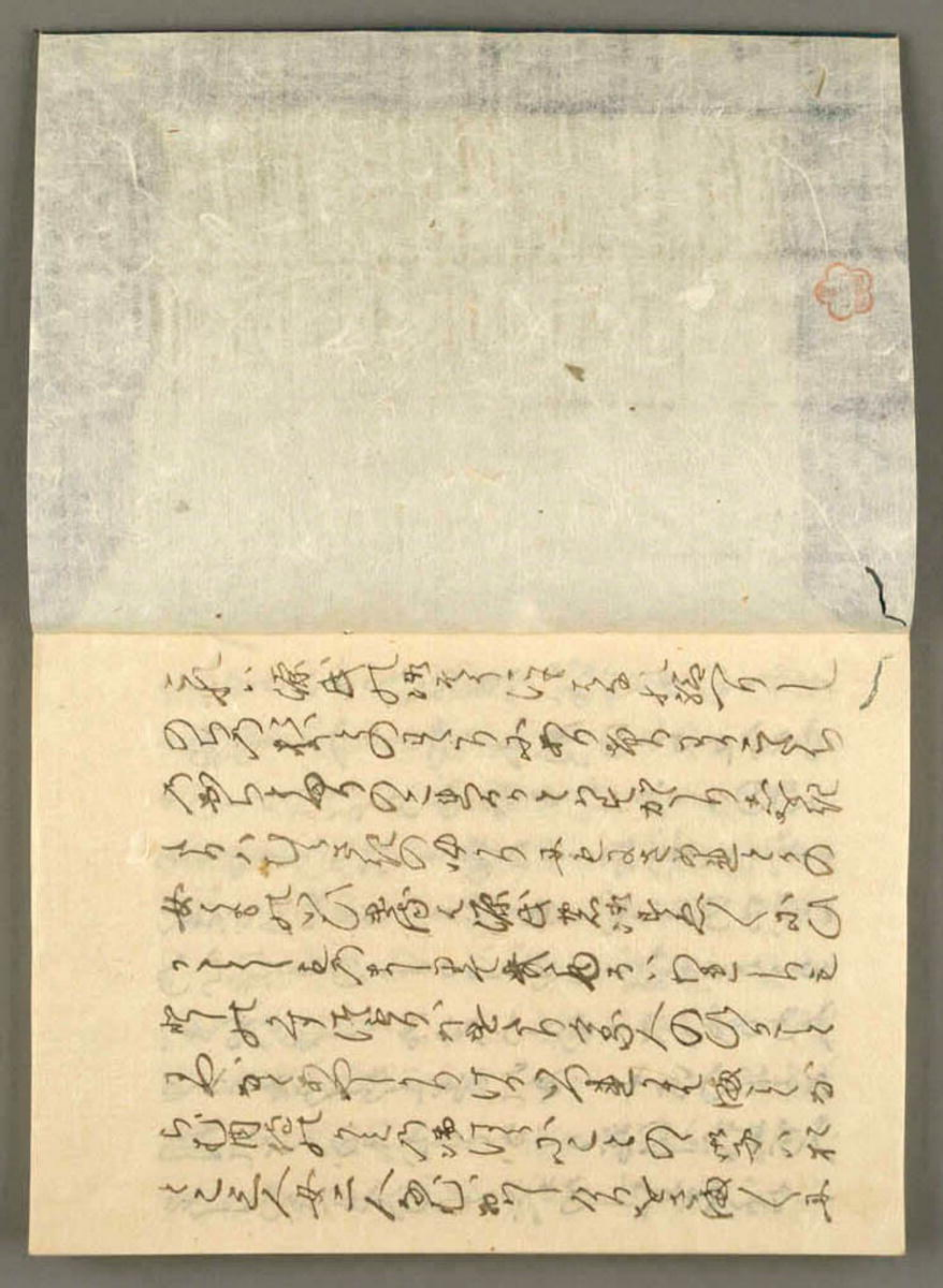
WA 7
(44)
263

[illegible]



風ふけばといはれつゝ猶さかりなるらん
浦の花をみれば、見渡すかぎりの大浦
の花
ながめてはあはれと詠じ、やつる花の色
とみてもあかぬは、よそにちる木のは
風たちてそら吹にみちて、あらそふとは
とりわき雪深くまがふ
こゝにその春の地主の桜の
物にまぎれてさえだかかる
桜花のひまなくふきちらすを
ちりの袖はありやなしや。その梢め
をみてひおぼえぬ月日もなく
ゆくすゑもゆくへもしらぬ花をかんの殿
えさまつるがほに佛をそふ白く
めりめでたく、これはなきもしら
あひて小松とうるはしかりしかど、みく
けふ松浦の浦にいたく散もちりしか
ひとりくはこれらのやうに、ほしき
かくもさめやらぬさまにつけて
いはれぬめいにかうやのに、かくのたまふを